

蓮池に月の光が

朱自清

(訳 富永涓子)

ここ何日か、はなはだ心が落ち着かない。今宵、庭に坐って涼をとっていると、突然、毎日通り過ぎている蓮池が、満月の光の中では、きっとまた別の趣があるはずではなからうかと思ひ起こされた。月はだんだんと高くなり、壁の外の道路での子供たちの笑いさざめきはすでに聞こえない。妻は家の中でうつらうつらしながら子供に子守唄を口ずさんでいる。わたしはこっそりと上着をはおり、かるく戸を閉めて外へ出た。

蓮池に沿って、曲がりくねった、ひっそりとほの暗い石炭屑を敷き詰めた路がある。昼間でも歩く人は少なく、夜になるとなおさら寂しい。蓮池の周りには多くの樹が植えてあって青々と茂っている。路の片側には、たくさんの柳と、名前の知らない樹がある。月の光が無い夜はこの路には樹がこんもりと茂り、いささか気味が悪い。月光は淡く、今宵はむしろそれがとてもよい。

わたしは只一人、手を背に回して路をそぞろ歩く。この見渡す限りの天地はまるでわたしだけのもののようで、わたしも又、普段の自分から抜け出て別の世界に入り込んだようだ。わたしは賑やかなのが好きだし、又静かなのも好む。皆と居るのも、一人だけなのもよい。今宵のように蒼茫とした月の下、何を思ってもよし、思わなくてもよし、まことに自由なことだ。日中はやらねばならないことや、話さなくてはならないことがあるが、今はすべて気にしなくてもよい。

ここは一人で居るのには実に良い所で、わたしは、今まさにこの限りない蓮の香りと月の光の心地よさをしばらくの間堪能してみよう。

曲がりくねった蓮池の上面には、見渡す限り葉が繋がっている。葉は水

から高く出ている、まるでしなやかに舞う女の裳裾のようだ。数え切れない葉の間にぱらぱらと飾り付けられた白い花はたおやかに開き、恥ずかしげに大きく咲いていて、まことに一粒の真珠のようであり、又、碧い空の星星のようだし、湯浴みから出たばかりの美女のようでもある。微かに風が通ると、かぐわしい香りが絶え間なく漂ってきて、遠くの高い建物からのぼんやりとした歌声を思わせる。この時、葉も花もかすかに震え、稲妻のように、瞬く間に蓮池にさざめいていく。葉は元々ぎっしりとつまっていて、ちょうど碧い波のうねりのようだ。葉の下にはそっと水が流れていて、葉に遮られてその色は見えないが、かえって葉は更に味わい深く見える。

月の光は流水のように静かに、さあっと葉と花に注がれている。蓮池に薄い霧がかかり、葉と花はまるで牛乳の中で洗われたようだし、又、細い紗の夢に覆われているようだ。満月ではあるが空には一筋の薄い雲がかかっているのも明るく照ってはいない。しかしわたしには、心ゆくまでぐっすりとはいかななくても、ひとときのまどろみを味わうにはぴったりした処だと思われた。月光は樹に遮られて照り、高い所に群生している灌木の斑な黒い影が落ちて、それはすっと立っている鬼のようであり、しなれた柳のうるわしい影は絵に描かれた蓮の葉のようだ。池の中の月光は決して均等ではない。しかしその光と影はまるでバイオリンの奏でる名曲のように調和の取れた旋律がある。

池の周りには、遠くから近くまで、高いところから低いところまで樹があり柳が最も多い。これらの樹は蓮池を幾重にも囲み、小路の脇にはわざわざ月の光を留めるように抜け落ちたような隙間がある。樹の色は一律にほの暗く、ぱっと見ると霧の塊がかかっているようだ。

しかし柳の姿は霧の中でもはっきりと見分けられる。梢の上には微かに遠くの山々が見え隠れているようだ。樹の裂け目からは、わずかに街灯が漏れ、今にも眠ってしまう眼のようにぼんやりとしている。この時一番賑

やかなのは樹の上の蟬と水の中の蛙の楽しんでいるかれらの声だが、わたしには何も気にならない。

突然、「採蓮」を思い出した。「採蓮」は江南地方の古い習慣でかなり昔からあり、六朝時代に盛んだったことは詞歌の中からおよそ知ることが出来る。蓮の実を採るのは若い女性で、彼女達はゆれる小船に乗って、ただ恋歌を歌う。それは楽しく、風流な季節である。梁元帝の《采蓮賦》の中に詠われているのがとても好い。

そこには うるわしい若者と、美しい乙女が
ゆれる小舟に乗って、黙って互いに見つめ合う
舟はゆらゆらと揺れ動き、二人は盃を交わし
櫂に藻が絡み、舟は浮き草から離れ動き出す
乙女はほっそりとしなやかな腰に薄い淡色の絹を巻き、ゆっくりと振り向いた
春が終わり夏の始まり、葉は青々として花は開く
裳裾が濡らされ、笑われるのではないかと船べりによって裾をからげる

これによって当時の楽しく戯れている光景がよく解る。これはまことに趣の有ることだが、最早惜しいことに、現在はこのような楽しみを享受出来なくなってしまった。

そこで又、《西洲曲》の句を思い出した。

秋に南にある池で蓮の実を採る、蓮の花は人よりも高く
腰をかがめて蓮の実をたのしんで採る、蓮の実は青く水のごとく

今宵もし蓮の実を採る人がいたら、ここの蓮の花も又“人より高い”は

ずだ。ただ流れる水が見られないのは何故だろう。しきりに江南が思い出された。——こんなことを思っていてふと顔を上げると、知らないうちに家の門の前だった。そっと門を押して入ると、何ひとつ物音はなく、妻はもう夢の境に入っていた。

一九二七年、北京清華園



(中国語原文) **荷塘月色** 朱自清

这几天心里颇不宁静。今晚在院子里坐着乘凉，忽然想起日日走过的荷塘，在这满月的光里，总该另有一番样子吧。月亮渐渐地升高了，墙外马路上孩子们的欢笑，已经听不见了；妻在屋里拍着闰儿，迷迷糊糊地哼着眠歌。我悄悄地披了大衫，带上门出去。

沿着荷塘，是一条曲折的小煤屑路。这是一条幽僻的路；白天也少人走，夜晚更加寂寞。荷塘四周，长着许多树，蓊蓊郁郁的。路的一旁，是些杨柳，和一些不知道名字的树。没有月光的晚上，这路上阴森森的，有些怕人。今晚却很好，虽然月光也还是淡淡的。

路上只我一个人，背着手踱着。这一片天地好像是我的；我也像超出了平常的自己，到了另一个世界里。我爱热闹，也爱冷静；爱群居，也爱独处。像今晚上，一个人在这苍茫的月下，什么都可以想，什么都可以不想，便觉是个自由的人。白天里一定要做的事，一定要说的话，现在都可不理。

这是独处的妙处，我且受用这无边的荷香月色好了。

曲曲折折的荷塘上面，弥望的是田田的叶子。叶子出水很高，像亭亭的舞女的裙。层层叶子中间，零星地点缀着些白花，有袅娜地开着的，有羞涩地打着朵儿的；正如一粒粒的明珠，又如碧天里的星星，又如刚出浴的美人。微风过处，送来缕缕清香，仿佛远处高楼上渺茫的歌声似的。这时候叶子与花也有一丝的颤动，像闪

电般，霎时传过荷塘的那边去了。叶子本是肩并肩密密地挨着，这便宛然有了一道凝碧的波痕。叶子底下是脉脉的流水，遮住了，不能见一些颜色；而叶子却更见风致了。

月光如流水一般，静静地泻在这一片叶子和花上。薄薄的青雾浮起在荷塘里。叶子和花仿佛在牛乳中洗过一样；又像笼着轻纱的梦。虽然是满月，天上却有一层淡淡的云，所以不能朗照；但我以为这恰是到了好处——酣眠固不可少，小睡也别有风味的。月光是隔了树照过来的，高处丛生的灌木，落下参差的斑驳的黑影，峭楞楞如鬼一般；弯弯的杨柳的稀疏的倩影，却又像是画在荷叶上。塘中的月色并不均匀；但光与影有着和谐的旋律，如梵婀玲上奏着的名曲。

荷塘的四面，远远近近，高高低低都是树，而杨柳最多。这些树将一片荷塘重重围住；只在小路一旁，漏着几段空隙，像是特为月光留下的。树色一例是阴阴的，乍看像一团烟雾；但杨柳的丰姿，便在烟雾里也辨得出。树梢上隐隐约约的是一带远山，只有些大意罢了。树缝里也漏着一两点路灯光，没精打采的，是渴睡人的眼。这时候最热闹的，要数树上的蝉声与水里的蛙声；但热闹是他们的，我什么也没有。

忽然想起采莲的事情来了。采莲是江南的旧俗，似乎很早就有，而六朝时为盛；从诗歌里可以约略知道。采莲的是少年的女子，她们是荡着小船，唱着艳歌去的。采莲人不用说很多，还有看采莲的人。那是一个热闹的季节，也是一个风流的季节。梁元帝《采莲赋》里说得好：

于是妖童媛女，荡舟心许；
鹄首徐回，兼传羽杯；
櫂将移而藻挂，船欲动而萍开。

尔其纤腰束素，迁延顾步；
夏始春余，叶嫩花初，
恐沾裳而浅笑，畏倾船而敛裾。

可见当时嬉游的光景了。这真是有趣的事，可惜我们现在早已无福消受了。

于是又记起，《西洲曲》里的句子：

采莲南塘秋，莲花过人头；
低头弄莲子，莲子清如水。

今晚若有采莲人，这儿的莲花也算得“过人头”了；只不见一些流水的影子，是不行的。这令我到底惦着江南了。——这样想着，猛一抬头，不觉已是自己的门前；轻轻地推门进去，什么声息也没有，妻已睡熟好久了。

一九二七年七月，北京清华园。

『朱自清散文精选』，朱自清，人民文学出版社，北京，2008，pp. 42-44，.

□□□□□